



ホーム>世界>インド「ダリットたちの尊厳回復プログラム」報告7

一緒に歩もう!一緒に変わろう!「立ち上がった世界の人々」の21世紀の夢を応援しよう!

プログラム内容
2010年9月

報告1
10月

報告2
11月

報告3
12月

年間レポート
2011年9月

報告4
12月

報告5
2012年1月

報告6
3月

報告7
6月

報告8
10月



抑圧された人々、ダリットたちの尊厳回復プログラム

南アジア・インド北部

ひとりひとりかけがえのない価値がある・人は平等だ

この考えの起源を、ラム・スラットさんの報告「制度化された差別(カースト制度)を乗り越えるための意識と行動の変革」から考える

変革のケース・スタディ ～ジャゲシュワールさんの場合～

北インドで暮らすジャゲシュワールさんは、ダリット(最も抑圧された階層)の一つ上の階層に属している。それまで教わってきた習慣通り、彼の家での会合でダリット出身の人たちに食事を出すときは、彼ら用に分けていたもっとも粗末なプラスチックのお皿に食事を載せて提供していた。その光景を目にしていた仲間のサブットリさんは内心、深い憤りを覚えていたが、それを言葉にすることはできなかった。

2010年後半に「人と社会のトータルな変革」をめざした研修会が彼の地域で始めて開催された。それにジャゲシュワールさんも参加することになった。私(ラム・スラット)は、そこで聖書で説明されている「人が何に似たものとして造られたか」、また「人の間に生まれる分け隔てがどのように取り除かれたか」をこの社会にある「慣習に潜む偽り」と対比して教えた。そのセッションに深く心を動かされたジャゲシュワールさんは、二度と差別をしないと心に誓い、誰にでも同じようなお皿で食事を提供するようになった。けれども、その新しいやり方は彼の家族には受け入れられなかった。「私たちは、彼らとそうするには決して関われないんだ」と強く反対した。しかし、平等に関わると決めた彼は、前のやり方に戻そうとはしなかった。やがて、彼の生活、そして家族にも平安と公平さが感じられるようになった。それと平行して、カースト制度に立ち向かう気力と勇気が増していった。以前は、祝福を受けると信じて最上層のブラミンの人たちの足に手を触れて挨拶をしていたが、それも止め、本当の神の祝福とは何かを理解するようになった、という。



変革のケース・スタディ ～分裂した人々の中での和解～

一度、差別が何層にも制度化されてしまうと、悲しいことに、もっとも虐げられている底辺同士の階層の間に深いいがみ合いと憎しみ、そして、断絶がしばしば起こってくる。ウッタル・プラデシュ州のある地域でも、この一年の間に別のカーストに所属する人との結婚を認めるかどうか、そして、別のカーストの人と食事をした人たちに関わるべきかどうか、という点で人々の間に深い亀裂が生じていた。

2012年の4月下旬、ダリット出身でインド憲法の起草者となったアンベドカル博士の誕生記念セミナーが、この地域で催された。断絶していた指導者同士や地域の人々は、当初、このセミナーに出席するつもりはないと話していた。けれども、当日になって、人々の心に参加しなければならないという思いが生じ、結果的に200人以上が出席することになった。私(ラム・スラット)は、このセミナーで、カーストは仕事の性質による階級ではなく、人間を本質的に分け隔てて互いに憎しみあうように仕向ける偽りの教えであると説明した。偽りをばらまき続ける悪が分裂をもたらし、人々の間に赦しをもたらす真実の神が和解をもたらすことを伝えてセミナーを終えた。

その次の日、不思議なことに出席した多くの人のあいだで分裂や憎しみを心から嘆き、悔い改める思いが生まれていた。それから、それぞれ対立しあっていた相手のところに行き、赦しを求め始めたのだ。こうして、和解が生じ、一緒になって地域社会に根づく差別を制度化したカースト制度と戦いおうという一致が生まれた。その晩には、指導者も、地域のすべての男性、女性、子どもたちまでもが心から喜びあったという。

ケース・スタディから日本人として考える

カースト制度の現実を知ると『ひとりひとりにかけがえのない価値がある、人は平等だ』という考えは、世界共通に当たり前のものではないことに気づかされる。彼らの苦闘を知ると、なぜ、日本にいる私たちは、当たり前のように「一人ひとりにかけがえのない価値がある」、また「人はみな平等だ」と言えるのかをあらためて考えさせられる。

「憲法で規定されているから。」

第二次世界大戦敗戦後に制定された現在の日本国憲法は、アメリカの影響を受けて個人の人権・生存権が大きく拡大されてできあがった。良く考えると、そもそも日本の私たちの文化、慣習のルーツに「ひとりひとりにかけがえのない価値がある＝個人の尊厳」を確信できる根拠があったのだろうか。

このような文章を書いている今、日本では昨年起こった「いじめによる中学生自殺」への対応に大きな波紋が広がっている。根深しいじめが中学生だけでなく、大人の社会にも蔓延していることを考えるとき、日本の私たちの社会やそこに暮らす私たち一人ひとりにとって、「一人ひとりにはかけがえがない。」と確信がもてる根拠はとても脆いと思わざるを得ない。

私たちは、ひとと違う部分を見つけては、人を自分より下に位置づける理由に用いようとする愚かな人間だ。同じアジアに位置する現代インドの底辺で苦闘する人たちによる変革のケース・スタディを読むと、社会に根深い「いじめ」のような暗闇に立ち向かい、私たちが互いに赦しあうことができるためには、人間をはるかに越えた愛と赦しの存在が必要であるとしみじみと思わされる。人間関係においてほど、自分の理解と愛の行動の限界を痛感することはないのだから。

[プログラム内容](#) [報告1](#) [報告2](#) [報告3](#) [年間レポート](#) [報告4](#) [報告5](#) [報告6](#) [報告7](#) [報告8](#)

[Page Top](#)

[Share](#) |

[ホーム](#) [活動内容](#) [FVIの特徴](#) [参加する](#) [寄付・献金](#) [お問い合わせ](#)

Copyright(c) Friends with the voiceless International All Right Reserved

